

【講演】

和歌と仏法の類比 ― 慈円と俊成 ―

山本 一

中世においては、形や数の一致や類似に基づく類比によって、仏法とそのほかの分野とを関連づける発想が見られる。また、仏法の思考法、考え方のパターン、あるいは教えを説く際の説明の方法や様式と、仏法以外の分野、たとえば和歌作品の様式や批評方法に、形の上での類似を認めていく発想もある。このような外形的類似による関連づけは、近現代人からは、荒唐無稽なこじつけと受け取られがちである。しかし、物質や現象を、分解したり分析したりして吟味する技術の乏しかった時代、一方で、多くの人々が仏法に普遍性と包括性を認めて、周りの世界には仏法が働いていると信じていた時代においては、さまざまな所に仏法との形の類似を見出し、そこに仏法のいわば変奏された姿を見ることは、世界や世界との関係についての人間の不安や疑念を、多少なりとも鎮める力を持っていたのである。中世の人々にとって、仏法は、個人の精神の内面に働くものというより、外側の世界において形として見て取れるべきものであった。

今回は、和歌と仏法に類似を見出した慈円の言説にまず、注目したい。彼の言説は、いずれも和歌の表現可能性を広げようとする実験的試みとセットになっており、そこには、中世の和歌史全体に関わる課題が内包されている。一方、俊成の『古来風体抄』は、和歌作品の優劣判断の機微というきわめて特化されたテーマを、仏法との類比を援用して説こうとした。和歌作品という具体の事例にひたすら対面することを求める『古来風体抄』の立場は、慈円の和歌言説とは異なる系譜に属し、むしろ『愚管抄』の一面に通底するとも考えられる。

【シンポジウム】

後白河院時代の文芸と文化 ― 唱導・和歌・美術 ―

《シンポジウム趣旨》

後白河院（一一二七―一一九二）時代について、あらためて考えてみたい。後白河院は平安時代末の動乱期、二条・六条・高倉・安德・後鳥羽天皇の五代にわたって「治天」の君として君臨し、平清盛や源頼朝と対峙した。仏道修行を熱心に行い、「法皇」として多くの仏教儀礼の場に姿を見せた。法会開催の趣旨を述べる唱導僧は、後白河法皇を末世に出現した仏であると讃えた。仏教に打ち込むと同時に今様にも熱中し、自ら『梁塵秘抄』を編んだが、第七番目の勅撰和歌集『千載和歌集』が撰進されたのも後白河院時代であった。仏像や絵巻

の制作を通じた美の領導者でもあった。棚橋光男氏は、後白河法皇を〈偉大なる暗闇〉と言ったが、その文化創造面を重視してこの時代をとらえようとした(『後白河法皇』講談社選書メチエ、一九九五年など)。彼を取り巻く多様な人間関係と、それにより生み出された文芸と文化、およびそこに表現された時代の精神について、興味は尽きない。

今回、音楽や儀礼・唱導という切り口から中世王権の性質に切り込んでおられる猪瀬千尋氏、後白河院時代の歌人伝について綿密な考証を積み重ねておられる中村文氏、「正倉院から蓮華王院宝蔵へ」というタイトルで古代天皇をめぐる絵画史を叙述され、後白河院時代についても魅力的な見方を提示しておられる増記隆介氏にお願いして、それぞれのご関心から後白河院時代の文芸・文化に迫っていただくことにした。複数の視点が出会い、異なる角度から議論を行うことで、後白河院時代へより近づくことができるとよい。(牧野淳司)

《参考文献》

- 猪瀬千尋『中世王権の音楽と儀礼』笠間書院、二〇一八年
中村文『後白河院時代歌人伝の研究』笠間書院、二〇〇五年
増記隆介『院政期仏画と唐宋絵画』中央公論美術出版、二〇一五年
増記隆介(共著)『天皇の美術史1 古代国家と仏教美術 奈良・平安時代』吉川弘文館、二〇一八年

後白河院における逆修と唱導

猪瀬千尋

逆修とは生前に行う自らの仏事である。ただしそれは自身のためではなく、ふつう、親族など故人追善を目的として行われる。後白河院の逆修は生涯で十四度を数える(『大原説経講敬白』)。天皇家の逆修では最多であり、ここでは澄憲や弁暁など、優れた唱導家たちが説法を行った。本発表では、澄憲『転法輪鈔』や『尊勝院弁暁説草』に見える後白河院の逆修記事に注目し、唱導の思想的役割・文学的特質について論及していく。

『転法輪鈔』には安元二年(一一七六)九月に天王寺で行われた逆修の表白が残る。これを読み解けば、後白河院の天王寺信仰の契機が、最愛の妃・建春門院の崩御にあったことがわかる。後白河院は、女院崩御の後、仙洞御所・法住寺殿に持仏堂として長講堂を建立するが、その名称の由縁は、天王寺で行われた長講なる儀礼に求められる。

また源平の騒乱の後、文治年間に行われた逆修では、追善対象が亡卒となる。院は自ら善知識となり、兵乱で亡くなった人々の追善にあたった。ここでは後白河院―平家が加賦色伽王―悪龍の関係に準えられる。

建久二年閏十二月には後白河院最後の逆修が行われた。院はすでに自らの死を予期しており、家臣らにそのことを伝える。すると弁暁は後白河院の予言を涅槃になぞらえて語る。

すなわち『涅槃経』や『普賢経』に説かれる「却後三月」——釈迦は自らの涅槃を予言し、その通りに入定する——を後白河院の最後の逆修にあてはめるのである。それは儀礼における死＝無常の克服とも言えよう。

後白河院近侍者たちの和歌活動

中村 文

後白河院時代、院近侍の卑位官人による和歌の〈場〉が形成されていた。『月詣集』七四一番詞書に、「藤原親盛院の北面にこれかれをすすめて歌合し侍りけるに、河辺のむしといふことをよめる」（源仲頼歌）と見えるごとく、その中心をなしたのは藤原親盛だったが、親盛や仲頼と院北面（後白河院北面歴名）や検非違使・左衛門少尉等として活動の場を同じくしていた、中原清重・平康頼らにも和歌事績が残る。親盛は同じく院近臣であった平親宗と共に、院の勧請した新熊野社における歌会に加わった他、これも院の勧請になる新日吉社での歌合を結構し、院近臣の広言や親宗が参じた。また、院北面に候した大江公景も北野社で歌合を催している。

後白河院の近侍者は神社社頭での歌合を多く形成したが、賀茂社においても少なからぬ事績を残している。治承元年（一一七七）に別雷社の神主となった賀茂重保は、後白河院の北面に候し、また今様相承系図（『今様の濫觴』所載）に小大進の弟子として名が見えて院との関わりは密接であったと推測されるが、その主催する歌会には、親盛の他、院の側近であった惟宗広言・藤原能盛が参じた。平安末期の賀茂社歌壇は、歌林苑の活動を引き継ぐ面を有していたが、院近侍者の和歌グループはここで地下緇流の歌人たちと合流し、一つの文芸的な運動体として、以後の和歌活動を展開していったのではないだろうか。

平安最末頃の催行と推定される「一品経和歌懐紙」は、こうした活動の一つの表れと考えられる。広言・能盛・重保の他、後白河院近臣として活動した藤原頼輔や藤原季能、また院近臣であった成親の甥藤原隆親、父弁宗の代から新熊野社別当を勤め、後白河院没後、その追善仏事の願主ともなった宗円（定能卿記）、公景主催の北野社歌会に出詠した寂蓮等、後白河院と深い関連を持つ者を軸として、賀茂社を詠歌場所としていた寛綱や勝命が加わっており、後白河院近侍者による和歌行事と見て大きく過たないだろう。

かつて、後白河院周辺は「歌謡文化圏」と考えられていたし、卑位官人の和歌活動は「歌林苑」概念で語られることが多かった。しかし、後白河院に近侍する官人層が形成していた和歌グループは、地下緇流の活動と緩やかに繋がりがつつ、平安末期歌壇を支える一大勢力をなしていたと考えられる。院近臣藤原経房の主催した二つの歌合を経て、鎌倉初期まで活動の継続が確認され、季能や公景等、九条家・御子左家と関わりを持たないまま新古今歌壇に参入する歌人をも生んだこのグループについて検討する。

日本美術史において、後白河院の時代には主に二つのイメージが与えられている。一つは絵巻制作の最盛期というものであり、後白河院周辺で制作、収集され蓮華王院宝蔵に納められた絵巻群は、その後の絵巻制作の規範となった。もう一つは、南都復興にともなう慶派を中心とする奈良仏師、陳和卿に代表される宋の工匠の活躍というイメージであり、これは武家の気風を反映した豪壮な鎌倉美術というイメージへとつながる。前者は、絵画史、書史の視点から語られ、後者は主に彫刻史、建築史によって提示される。藤原道長の時代を中心とする後宮における物語の隆盛を受けて平安時代後期に発展した絵巻は「和」の絵画を代表する。一方、南都復興をめぐる天平の造形は、初・盛唐の美術を受容したものであり、「入宋三度」と標榜した重源をめぐる宋の造形とともに「漢」の世界に連なる。このようにこの二つのイメージは、一見相反するものに思えるが、前者の「和」の世界は、唐の文化を消化する過程で萌芽し、後者による宋代の造形を意識する中で強化された。そのような視野に立てば、蓮華王院宝蔵の絵巻群は、聖武天皇ゆかりの正倉院の屏風群を意識して制作、収集されたものであり、屏風から絵巻へという形態の変容は、壁画中心の唐代絵画が、卷子や掛幅等の鑑賞絵画を主とする宋代絵画へと変化する状況と軌を一にしていることに気づく。また、唐の宮廷行事等を描いていた正倉院の屏風群は、日本の年中行事、社寺の縁起等を主題とする蓮華王院宝蔵の絵巻群へと変化している。すなわち、後白河院の時代とは、過去の造形の中に残された唐のイメージと、同時代の宋のイメージとを二つながら取り込み止揚した時代であり、その先鞭は、藤原道長によって付され、これを白河、鳥羽、後白河三代の治天が王家に吸収したものと位置付けられる。本発表では、後白河院政期における絵画制作の特質を以上のような観点から考えることとしたい。

◇大会一日目シンポジウムは、科学研究費補助金基盤研究(B)「唱導の場から見た日本古代中世文学の特質についての総合的研究」(研究代表者:牧野淳司/課題番号:20H01235)と共催です。